

彼は今でも自分の戀人を殺したのは自分だと思つてゐる様だけれど、彼の弟も又遺傳性の梅毒と、肺を患つて死に類してゐたのだ。

悲觀厭世の揚句でもあつたらう。

弟は一夜日本刀を、やせさらばえた手に握つて床を抜け出し、兄の戀人の寢所に押し入つたのだ。そして一刀の下に袈裟掛けに、女の左の乳まで切り下げ、自分も血煙りを浴びて其の場に喉を掻き切つて死んで了つた。

此の事を彼の父や義母は、彼には秘密にしてゐた。

當時彼は出石寺に居て、急報に接して家に歸つた其の日から、氣が變になつたのだつた。

僕は自分を第四人稱にして考へたりする様になつた。

發狂してから既に十四年の歳月が流れてゐる。

口髯を生やした男が來て言つた。

「お父さんがあの畑の中に、廣い奇麗な家を建てよられるから、もつ一つ時して其處へ移つて、